

恵那のひな祭り

土人形



熊谷直実

はじめに

一般的に三月三日に行われる「ひな祭り」は、年中行事を行う日の中で特に重要とされた五節句（旧暦一月七日の人日へじつ・三月三日の上巳へうし・五月五日の端午へんごん・七月七日の七夕へせき・九月九日の重陽へうやう）の一つで、恵那地方では、旧暦に合わせて四月三日に行われるところが多いようです。

資料館では、企画展や館内のしつらえなどを通じて、年中行事の紹介に努めており、開館以来、春には「ひな祭り展」を開催しています。

ひし屋資料館で所蔵しているおひな様で、ちよっと昔の「素朴な雅」の世界をご堪能ください。

おひな様の始まり

◎人形の始まり

中国では、三月の上巳（じよ）の日（三月初めの巳の日）に、川へ行って禊（みそ）をするという風習がありました。これは後に「曲水（まがみづ）の宴」と呼ばれる行事となり、日本では、平安時代に宮中や貴族の間で行われていたようです。

日本でも、農耕儀礼の祓（は）えの行事として、三月の初めに海や山へ出て一日を過ごし、身のけがれを洗い流す習慣がありました。また、紙を人間の形に切り抜いた「人形（ひとがた）」を作り、体をなでて、けがれを落として川へ流していました。この自分の身代わりの「形代（かたしろ）」は、そのまま川や海に流すので、素材も紙や草などを使った簡単なものでした。

室町時代には、幼児用の形代（かたしろ）の一種で、かかしに衣装を着せたような「天児（あまご）」と綿の入った縫いぐるみの形をした「這子（こま）」という、幼いこどもの身辺に置いて、災いを移し負わせるものも作られ、ひな人形の原形と言われています。

一方で、平安時代の宮廷貴族たちの生活に「ひいな」という人形の遊びが出てきます。「ひいな」という言葉は「雛」の古語で、「小さくてかわいらしい」という意味が、小さな人形の名称となったようです。

◎ひな祭りの始まり

三月上巳の日に「人形」にけがれを移し、「形代」として水に流した行事と、ひな遊び、「天児」などが時の移り変わりの中で結びつき、人形祭りが始まったようです。

ひな祭りの最初は、女の子の誕生とは直接関係がなかったものの、江戸中期頃からは女の子の初節句を祝うものとなりました。

ひな祭りの時期は、明治になって旧暦から新暦に変わりましたが、新暦の三月三日はまだまだ寒く、一カ月遅れがちょうど旧暦の桃の節句頃の陽気になるといので、四月三日に行う所と三月三日に行う所とに現在も分かれています。

ひな人形の形式の変化



◎室町以降江戸初期までは立ちびなが主流

もともとひな人形というのは、子供たちがおままごとをするためのもので、初期の頃は非常に簡素なものでした。これは今でいえば立ちびなの形式です。

◎豪華で華美な享保びな

ところが江戸時代に入って、大人が贈るものとなった時に質的な変化が起きます。それまでは床の上に毛せんを敷いてその上に並べる程度だったものが、寛永のころには、台を付けた豪華な衣装の座りびなが姿を見せ始め、元禄時代には、添え人形やひな道具も加えられ、段を組んで立派な飾り付けをするようになります(寛永びな、元禄びな、享保びな、御殿飾り)。

◎現在のひな人形のルーツ、古今びな

享保びなが次第に豪華を競うようになると、町奉行は贅沢禁令の御法度を出して寸法を制限します。これに対して江戸日本橋人形町で写実的な新型のひな人形、古今びなが考案され、人気を博します。ひな

商人がそれぞれ独自の趣向によって、さまざまな容姿のひなを製作し、現代びなのルーツとも言われています(古今びな、有職びななど)。

明治中期になると、「古きよき時代」を懐かしむ風潮が各家庭で強くなったと言われ、段飾りや御所の寝殿造りとひな飾りなどが盛んになり、段飾りのセットものが販売されるようになります。

◎親王飾り、御殿飾りから屏風飾りへ

ひな飾りの中心は、時代によって変化はあるものの、土人形や男女一對の親王飾り、御殿飾りでした。昭和三十五年頃までは、このスタイルが多かったようですが、その後は、次第に屏風飾りが普及し、今日のひな飾りの主流となっています。

恵那のひな祭りの特色

(一) 期日は旧暦の三月三日に

江戸時代には旧暦の三月三日に行われました。現在の四月三日に行うようになったのは、地域によって異なりますが、昭和に入ってからの方です。



(二) ひな祭りは男女のお祝い

ひな祭りは女の子とは限らず、男女とも同様に祝い、五月の節句には男びな飾りはしない家が多かったようです。昔は、嫁入り道具としても持っていました。今は、初節句に内裏びながお嫁さんの在所(実家)からお祝いとして贈られるのが普通です。また、親戚からは男の子には男の人形、女の子には女の人形が贈られました。人形は、明治から昭和初期までは土びなが多かったようですが、中には高嶺の花であった衣裳びなや御殿飾りもありました。

(三) 土びなを飾る

東濃地方は、明治から大正にかけて、全国でも稀に見る土人形の生産地、消費地として有名でした。生産地では、三河の職人との人的交流、犬山での製作技術の習得などによる技術の向上や良質な陶土の採取が行われ、消費地では、養蚕業の導入と発展による現金収入の増加によって生活に余裕が生じ、土びなの贈答が盛んに行われて節句に飾られるようになったのです。

土びなの生産は、主に農家の農閑期の副業として営まれていました。一大生産地であった瑞浪市市原や一日市場をはじめ、東濃各地で作られ、市内では、武並町藤、長島町中野、三郷町佐々良木、山岡町久保原などで作られていたことが分かっています。

(四) 人々の生活に結びついていた土びな

節句に飾られた土びなは、内裏や長寿を祝う「高砂」、学問の神様「天神さん（菅原道真）」、七福神の「恵比寿・大黒・弁天」、「福助・お福さん」などの縁起物のほかに、歴史上や伝説上の人物などが多く作られ、飾られました。また、「馬乗り鎮台」や「乃木大将」、「明治天皇」など、その時代の世相を示すものもありますが、東濃地方や三河地方では、人形浄瑠璃や地芝居（地歌舞伎）が盛んであったためか、人気演目の名場面の人物が多く作られ、盛んに贈答されていました。

しかし、素朴で味わいのあるこれらの土びなも、高嶺の花であった衣裳びなや、ガラスケースに入った玩具人形が買えるようになった昭和三十年以降、急速に忘れさられていきました。

(五) 御殿びなと愛知常滑産の玩具人形

昭和三十年代ごろから御殿びなとともに、陶磁器業者が作った玩具人形をガラスケースに入れて贈答することが多くなります。

市内で見つかる玩具人形の多くは「王様印」がトレードマークの愛知常滑市の生産者のものです。内裏びなは少なく、多くは「藤娘」や「春駒」、「娘道成寺」などの舞踊人形でした。初節句のお祝いにお嫁さんの在所から豪華な御殿びなや段飾り、親戚からの贈り物として玩具びながよく利用されたのでしょうか。

(六) からすみをはじめ、たくさんのお供え

お供えには、白飯や赤飯・味噌飯・五目飯にアサリの汁やつぼ（タニシ）の味噌汁、副食物としてワケギとつぼの味噌あえなどをつけました。餅は三段か五段にするのが普通で、アワ・キビを入れた黄餅、コキビ・高キビを入れた赤（褐色）餅、ヨモギ・ゴボウの葉を入れた緑餅、普通の白餅を使いました。また、ほとんどの地域で、からすみ（米の粉を練って砂糖で味をつけて蒸したもの）を供えました。

お菓子は、特別な家では、干菓子を買っていましたが、一般的には、へげもち（かきもち）、せんべい、自家製のあられ、いりまめ、すまめ、はげきび、落花生などを備え、それに白酒をつける家もありました。

おひな様には、このように多くのお供え物をしないと、空腹になって外に出て、麦の穂や野菜を食べてしまうので、普通の食べ物のお菓子もたくさん供えなさいと言われていたようです。

(七) おやつがなかった時代の楽しみ「がんど打ち」

ひな祭りの日、子どもたちは、大きい袋を持って同じ地区内の家をまわり、「おひなさま、見してくんさい」と言い、おひな様に供えてあったものを貰いました。これを「がんど打ち」といい、以前は恵那市内のどの地区でも行われていました。

(八) おひな様に食べられないように「麦見せ」

子どもたちのがんど打ちが終わった頃を見はからって、おひな様に麦見せをしました。麦見せとは、おひな様に麦を見せることで、部屋の障子を開けて田畑を見せたり、家族の誰かがおひな様の一つを持って自分の家の田畑を見せて歩いたりしました。

(九) 願いを込めて「ひな流し」とひな納め

ひな祭りが終わると、一体のおひな様は必ず川におさめなければならぬとして、古くなったり、傷のついたりしたおひな様を選んで川へ納める地区もありました。この風習は、人間の心身のけがれを人形に移し、この人形を川に流すことによって災いを除こうとする、古い時代の祓い(はらい)の行事の名残りと言えるでしょう。

おひな様をしまうのは、「あまり遅くまで出しておくと娘の婚期が遅くなる」とか「早く収納するとその年の仕事廻しが早くなる」といった三日の晩に納める所が大半でした。「せつかく一年に一回出したのだからもう一晩ねかせて」と四日朝にしまう地区もありました。

◎お内裏様は右？ 左？

内裏雛は宮中の並び方を模しています。中国の唐、日本では、昔は左が上位でした。左大臣と右大臣では左大臣の方が位が高いし、舞台でも来賓が座る上手は左側です。この伝統は、明治天皇の時代まで続きましたが、文明開化で皇室も洋風化が進み、大正天皇は即位式のときに右側に立たれたのです。これが皇室の伝統となり、昭和天皇も右側に立たれました。これを真似て東京では、男雛を右(向かって左)に置く家が多くなり、京都では、伝統を重んじて左(向かって右)に置く家が多いといえます。

【参考資料】

- 『現代こよみ読み解き事典』柏書房
- 『こどもにつたえたい年中行事・記念日』萌文書林
- 『雛祭り雛めぐり』文化出版局
- 『恵那市史 通史編 第三巻の二』恵那市
- 『美濃の土人形』美濃土人形研究会
- 『土びな辞典』中馬のおひなさん』足助町観光協会
- 『愛知の土人形』名古屋博物館
- 『三河土人形』安城市歴史博物館

平成二十五年二月

編集・発行／ 恵那市教育委員会文化課



美濃中野土人形

